

明海大学 不動産学部

不動産の不思議

第206回

学生たちの視点と発見

【学生の目】

東京・大手町の地下道からC3を出ると読売新聞東京本社ビルに入る。外観が重厚感にあふれる一方、3層吹き抜けの1階ホールには解放感がある。本社ビルの重量感と利用時の開放感を両立させる設計意図を感じる。

超高層ビルのガラス壁

建設目的やデザインを知ると……

ヤーで固定されている。ワイヤーはオブジェのようでも、構造体のようでもあり、不思議な造りだ。普通は大きな鉄骨でガラスを支えるが、あるはずのものがないことに対して感じる新鮮さがある(池羽七海「不動産の不思議」第87回「15年6月9日号」)。普通のワイヤーかと思っただが、触ってみると堅固で微動だにしない。見た目のギャップを感じたが、採光や視界を確保していることから次第に温かみを感じるようになった。眺めていると理解すると印象が変わってくる。



ガラス壁を固定しているワイヤーはオブジェのようであり構造体のようでもある

ビルは清水建設が施工し、13年11月に竣工した。地下3階地上33階、延べ面積8万9650㎡、高さ200mの超高層建物で、当時は大手町地区で最も高い建物だった。

「こんな状況でも新聞発行ができる



池羽 七海
不動産学部4年

人の帰宅困難者を受け入れる。下調べのあと現地に行った第一印象は冒頭のとおりだ。ビルは12階までの基壇の上に33階の超高層部が乗るような設計だ。12階の屋上庭園に行く、都会を感じさせない自然があふれていた。

貴重な自然や空を満喫できるよう、屋内は2層分の天井高があり、視線を遮らないよう、ガラスはワイ

と、ワイヤーと細い鉄の棒を組み合わせたものがガラスを支える方立(ほつだて)になっていると理解できた。引っ張りに強い鉄の特徴を生かせば、小さい部材で支えることができる。ワイヤーが弧になっているのは、引っ張り力が働く工夫と考えれば、堅固に張られる理由がわかり、力強くも見える。

ビルの建設目的やデザインの本質

【教員のコメント】

鉄とガラスを用い、石造で重々しく閉鎖的な空間を、明るく軽快で開放的な空間にしたのは、建築の巨匠ミス・ファン・デル・ローエである。20世紀中層に設計した超高層ビルは今も新鮮だが、日本で鉄とガラスのデザインが進化し続けている。

社会に出ると仕事に多くのオフィスを利用する。ビルが伝えたものを確認しそれを共有し、ビルと対話しながら仕事がしたいと思っ。